

「3カ国民衆会議」実行委員会 趣意書

～危機の21世紀を超えて、つながりあい、食の幸せを未来に手渡すために～

2018年8月3日

21世紀に生きる私たちは、未来の世代にどのような「食」と「農」を手渡していけるでしょうか？ そのためにどのような「農」を取り戻すことが出来るでしょうか？

いま、日本だけでなく、世界各地で「食」とそれを支えてきた農家は深刻な危機に直面しています。「食」はなくてはならない命の源です。これまで私たちは、食卓にのぼる「食」の多くを「家族による小さな農業（家族農業）」に頼ってきました。しかし、いま、これまでの「農」の営みが続けられないところまで、世界中の農家は追いつめられています。

その原因に、もうけを最重要視する投資や企業によって構築されるグローバル・フードシステム、それを推進する各国政府や国際機関の政策、地球温暖化などによる異常気象があります。国によってその影響は異なりますが、家族農家の手から、農地・水・たね（種子）・森へのアクセス、そして「どこで何をどう育てるのか」の決定権が急速に奪われつつあります。いつの間にか遺伝子組み換え作物が栽培され、みなさんの口に入ってしまったという現状もその一例です。農家の苦境は、「食」の受け取り手でもある私たちが、「どこで誰の育てた何をどう食べるか」の選択肢と決定権を失うことにもつながっています。つまり、「食」と「農」の支配を通じて、一人ひとりの生き方や生命までもが左右される時代となっています。

グローバリゼーションの負の影響をもっとも深刻な形で受けた「南（途上国）」の先住民族や家族農業を営む人びとですが、何重にも及ぶ圧力を受けながらも、それを乗り越えるための創意工夫を積み重ねてきました。「母なる地球（マザーアース）」、「食の主権」、「たねへの権利」、「アグロエコロジー」、「小農の権利／主権」—これらのビジョンや実践は、国境を超えた人びと同士の間を通じた、世界に広がり、多くの素晴らしい変化を生み出してきました。来年には、「国連家族農業の10年」が始まります。

これを受けて、日本の私たちは、アフリカのモザンビーク、南米のブラジルから来日する農民男女、教会関係者、女性運動、環境や人権団体、若手研究者の皆さんとともに、多様性を大事にし、「食と農の未来」を描き、課題を整理し、これらを乗り越えるための方策と計画を話し合うことになりました。

3カ国の人びとの出会いを通じて、みなさんの「共通の家」であるはずのこの地球、自然、地域社会、農家、一つひとつの命を守り、つながりと主権を土台とした幸せと喜びあふれる「食」と「農」の関係を未来の世代に手渡せるよう、力をあわせたいと思います。